

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：17301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K13184

研究課題名(和文) ふりの教育哲学 教育的パフォーマンス論の深化と構築に向けた基礎的研究

研究課題名(英文) 'Furi' as a Concept in Educational Philosophy: Basic Research Aimed at Deepening and Developing Educational Performance Theory

研究代表者

山岸 賢一郎 (YAMAGISHI, Kenichiro)

長崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：20632623

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近代および現代の教育言説と教育実践を、そしてそれらを生み出している私たちの認識と思考の枠組みを、「ふり」という概念を用いて、問い直そうとするものである。「ふり」とは、「遂行」(本物の行為)と「演技」(偽りの行為)の連続性を強調するための語である。すなわち、「ふり」とは、完全な「遂行」でもなければ完全な「演技」でもない、その両者が交じり合った人間の営為を意味する。本研究は、人間の営為の多くは「ふり」である、という着想のもとで、ルソーの教育思想、日本の道德教育、学習者の自律を目指す教育について再考し、「ふり」の誕生と発達について論じるものである。

研究成果の概要(英文)：In this study, we use the concept of 'furi' to re-examine early-modern and present-day educational discourse and practice as well as the cognitive and ideological frameworks that generate them. The term furi is intended to underscore the continuity between performance as in accomplishment (true act) and performance as in acting (false act). In other words, furi is neither a complete accomplishment-performance nor a complete acting-performance; it refers to human acts that involve an interplay of the two. On the assumption that many human acts are furi, we re-examine Rousseau's idea of education, Japan's moral education, and educational approaches that emphasize learner autonomy. We also discuss how furi emerges and develops.

研究分野：教育哲学

キーワード：ふり 教育哲学 道德教育 演技 演劇 遂行 自律 ルソー

## 1. 研究開始当初の背景

人間のパフォーマンスは、近現代の教育をめぐる認識・思考にとって常に関心的であった。「その振る舞いは、心から為された本物の振る舞いなのか?」。教育をめぐる近現代の認識・思考は、しばしばこの種の問いを軸として組み立てられてきた。たとえば、あのルソーの思想がそうであるように。だが、人間の営為をこれとは別の仕方でも認識し、思考することも可能であろう。本研究は、この可能性について、「ふり」という概念を頼みとして論究しようとするものである。

人間のパフォーマンスに関わる近年の先行研究としては、クリストフ・ブルフによる身振りに関する研究、藤川信夫のドラマトウロジー研究、土戸敏彦による教育的パフォーマンスに関する研究、などを挙げることができる。ブルフは、身振りのミメシス的で遂行的な性質について検討している(ブルフ「身ぶりのミメシス的・表象的な性格—人文社会科学における身振り研究の展望—」『東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室研究紀要』第38号、2012、等)。藤川を中心とした研究グループは、ゴッマンの舞台論に基づいて、「攪乱的出来事」が人々の織りなす諸関係の舞台をいかに再編していくのかを記述する(藤川信夫編『教育/福祉という舞台—動的ドラマトウロジーの試み—』大阪大学出版会、2014、等)。

こうした諸議論にもまして、土戸の教育的パフォーマンス論は、「遂行」と「演技」とを切り分けずに人間のパフォーマンスを捉えることの必要性を説いている(土戸敏彦「行為の両義性としてのパフォーマンス—教育的コミュニケーションへの示唆—」、『九州大学大学院教育学研究紀要』第13号、2011、等)。そして、土戸の議論を受けて発展してきた「ふり」をめぐる教育哲学研究こそが、本研究の直接の出発点となっている(宮川幸奈・土戸敏彦・山岸賢一郎・岡野亜希子・京極重智・藤田雄飛、「ふり」の教育哲学 1.5—九州教育学会ランドテーブル報告と今後の展望—、『教育基礎学研究』第11号、2014、61-75頁、他)。

ここで言う「ふり」とは、「遂行」と「演技」の連続性・不可分性を強調しながら、人間のパフォーマンスをこの両極にまたがるものとして捉えるための概念である。「ふり」の教育哲学とは、すなわち、人間の振る舞いを「遂行」と「演技」の複合体として捉えようとする認識と思考の構えである。

## 2. 研究の目的

人間の振る舞いの多くは「遂行」と「演技」の複合体である。言い換えるなら、その多くは「ふり」である。本研究は、こうした発想のもとで、「遂行」と「演技」とを峻別する近現代の教育言説・教育実践と、それが基づくところの認識・思考の枠組みそれ自体を問い直そうとするものである。同時に本研究は、

「ふり」という視座から人間のパフォーマンスを見つめ直すことで、教育的パフォーマンス論の深化と発展に、ひいては人間理解の深化と発展に、貢献しようとするものである。

以上の問題意識に基づく本研究は、次の二点を直接の目的とする。第一に、「ふり」という概念を用いて、近現代の教育言説・教育実践を批判的に検討すること。より具体的には、ルソーの礼儀作法論・演劇論・教育論、自律と教育をめぐる近現代の思想、現代日本の道徳授業教材とその活用法を、「ふり」という視座から批判的に検討すること。第二に、上の批判的検討からもフィードバックを得て、さらには、ラカンの鏡像段階論をはじめとする「ふり」の誕生や発達に関わる議論からも示唆を得て、「ふり」概念を精緻化しつつ、「ふり」に関する知見を整理すること。またこれによって、教育的パフォーマンス論の深化と発展に寄与すること。

## 3. 研究の方法

上述の問題意識と目的のもと、本研究は、近現代の教育に関わる思想と言説を、「ふり」の教育哲学の観点から検討する作業を行った。検討の対象としたのは、ルソーの礼儀作法論・演劇論・教育論、自律と教育をめぐる近現代の思想、道徳教育に関わる諸言説(道徳授業資料とその活用法を論じたテキストなど)、人間の振る舞いの発達に関わる諸テキスト(ラカンの鏡像段階論など)である。また、これらの検討の成果を研究組織内で持ち寄り、「ふり」に関する知見を整理する作業を行った。

## 4. 研究成果

以下では、研究の各論ごとに、その成果を報告する。

(1) ルソーの思想をめぐる「ふり」の教育哲学(主担当: 岡野亜希子)

岡野は、「遂行」と「演技」とを二項対立的に捉える考え方や、さらには「演技」に対する「遂行」の優位性を主張するような思想の一つの成り立ちを、ジャン=ジャック・ルソーのテキストのうちに取り出すことを試みた。

たとえば『学問芸術論』では、礼節が美德そのものとは信じられなくなった当時の社会において、学問と芸術による習俗への貢献に疑問の目が向けられている。仰々しい礼儀作法は人々に上品さを強要し、それぞれの精神を同一の鋳型へと投げ込む。ルソーによれば、今日の学問も芸術も、政府や法律ほどに専制的ではないが、人々が自発的に隷属状態を好むようにさせるという意味においては、政府や法律以上に強い力を持っている。

また教育論『エミール』では、教訓や物語を使った「書物による教育」が批判され、子どもは書物からではなく「事物そのもの」の中から、自ら教訓を見つけ出すことの重要性

が繰り返し強調されている。そこでは、例えば当時よく読まれたラ・フォンテーヌの寓話集を使った教育が取り上げられる。寓話は擬人化された動物たちのやり取りで構成された短いエピソードで成り立っており、それぞれのエピソードの最後には、登場人物がエピソードから得られる「教訓」を語って終わる。『エミール』では、この寓話における芝居がかったセリフ回しや高尚な文体、さらに動物の擬人化それ自体も問題視され、得られるはずの教訓が子どもの実生活へ還元されることがいかに困難であるかが論じられている。

さらに『ダランベールへの手紙』においては、演劇そのものが批判の対象となる。ジュネーヴに喜劇場を建設して洗練された演目（例えば美德や愛や誠実や友情など）を上演し、民衆の道徳的教化を図ろうとするダランベールの提案に対して、ルソーは真っ向から反対する。美德も誠実さも友情も、本来「われわれの内部」から呼び起こされるべきであって、決してわれわれの外部から、つまり劇場の舞台や虚構の物語の中から持ち込むべきではない。そもそも「俳優」という職業は、自分を偽り別の人物を演じることで成立する、見せかけの美德の体現者である。

このような劇場演劇による「排他的なスペクタクル」に代わって、ルソーは民衆のよりよい余暇のために、「純粹無垢なスペクタクル」＝祝祭 fete を提案する。たとえば広場に集まった民衆が、自発的に、自然と始める歌や音楽やダンスのひとつ。この祝祭の描写を通じて現れるのは、自身の（例えば息子、夫、市民としての）社会的な責務を背負ったままで祝祭を享受する人々による理想的な共同体の構想であり、また、外部から主題を設定される＝命令されることなく、民衆自らが自発的に、自分自身の道徳的教化を可能にするような教育システムである。

被教育者自身の完全な遂行によって成り立つ教育と、それによって実現される社会。この祝祭が描写する理想的な共同体と教育システムの構想は『エミール』の教育論に引き継がれ、近現代の教育言説や教育実践の思想的な支柱となってきた。人間の生そのものを「遂行」と「演技」との対立構造において二分し、「演技」に対して「遂行」の優位性を主張するこれらルソーのテキストは、いくつもの矛盾を抱えながら、「被教育者の自律」という教育理念に正当性を与えてきたといえるだろう。

## (2) 自律と教育をめぐる〈ふり〉の教育哲学 (主担当：宮川幸奈)

宮川は、自律と教育をめぐる近現代の思想、とりわけカントの思想とその解釈を通じて教育学の世界に広く流布した、いわゆる「自律と他律のパラドックス」について、〈ふり〉論の視座から検討した（なお、宮川は、平成27・28年度は研究協力者として、平成29年度は分担者として本研究に従事した）。

研究の第一段階として、〈ふり〉概念によって、教育学における自律に関する議論の前提を問い直す作業を行った。近現代の教育（哲）学が取り組んできた「自律と他律のパラドックス」とは、未だ自律していない子どもを自律させるためには教育という他律が必要だが、「自律せよ」という他者の命令に従う限り子どもは他律状態から抜け出すことができないということである。カントによる定式化から約200年間、多くの教育（哲）学者たちが様々な角度からこのパラドックスに取り組み、事態を整合的に理解・説明しようとしてきたが、他律から自律への跳躍が十分に解明されたという共通認識には至っていない。この問題に対して、〈ふり〉論は、パラドックスを見出さざるを得なくするような自律と他律のとらえ方自体を問い直す視点を提供する。すなわち、他律と自律を全く異なる状態として想定し、前者から後者へ移行するという見方そのものから距離をとる視点である。〈ふり〉概念は、人間の行為は遂行と演技の双方の要素を含む両義的なものであること、それにもかかわらず遂行と演技を切り分けようとする二項対立図式が教育言説・教育実践を規定していることを明らかにする。この論を踏まえると、自律をめぐる議論もまた、同型の二項対立図式に規定されていることが見えてくる。すなわち、人間の行為は自律と他律の双方の要素を含む両義的なものであるにもかかわらず、自律と他律を切り分けようとする二項対立図式が教育言説・教育実践を規定しているということである。遂行と演技の区別が行為者本人にもつけられないのと同じように、私たちは、自分の行為が自律によるか他律によるかを明確に区別できない。そのため、人間を完全な自律者か他律者のどちらかに振り分けることはできず、パラドックスととらえられてきたような、完全な他律から完全な自律への移行を想定することもできない。自律と他律の両義性を踏まえると、人間の成長・発達には、より他律的な状態からより自律的な状態に近づくという面だけでなく、必要に応じて他律に服することができるようになる（時と場合に応じて、自己主張を抑えて他者の命令に従えるようになる）という面もあるのだと言える。

〈ふり〉論を踏まえれば自律と他律の両義性は明らかであるが、私たちにとって自律と他律の区別が重要であることも事実である。私たちはどのようにして、両義的であるはずの自律と他律を区別するようになるのか。自律と他律の区別はどのように成り立っているのか。研究の第二段階として、これらの問いに答えることを試みた。そのために着目したのは、人間が自らの行為について意図や理由を述べることである。なぜなら、日常的には、自らの行為について意図や理由を述べることで、その人間が少なくとも当該の行為に関して自律しているという判断の手がかりと

なっているように思われるからだ。意図と理由をめぐる諸議論（アンスコム『インテション—実践知の考察—』菅豊彦訳、産業図書、1984年；野矢茂樹『哲学・航海日誌Ⅱ』中公文庫、2010年 など）を踏まえると、自律と他律の区別の意味とは、行為者が、自らの行為を自らが決めたのだと信じ、引き受けているかどうかであると考えられる。その行為の引き受けは、行為の意図や理由を自ら述べることに於いてなされている。したがって、人間が自律と他律の区別を身に付け、自律者として振る舞うようになるということは、意図や理由を尋ね述べ合うコミュニケーション空間に参入することだととらえられる。このようにとらえると、大人が子どもに行為の意図や理由を尋ね、時に適切な意図や理由を教えるという働きかけが、行為を引き受けるといふ意味での自律を達成させるために非常に重要であることが明らかになる。

第一段階の作業では、本研究課題全体の第一の目的である、〈ふり〉論の立場による近現代の教育言説・教育実践の批判的検討を、自律概念に即して行った。続く第二段階の作業では、両義的であるはずの自律／他律が区別されていることを、意図や理由を述べるといふパフォーマンスによって解釈した。この作業によって、〈ふり〉研究を軸とする教育的パフォーマンス論の精緻化（本研究課題全体の第二の目的）を一歩進めることができたものと考えられる。

### (3) 道德教育をめぐる〈ふり〉の教育哲学（主担当：山岸賢一郎）

山岸は、〈ふり〉の教育哲学の視点から、道德授業用の資料（教材）とその活用方法について、より具体的には次の二点について、批判的な検討を行った。第一に、『心のノート 中学校』などに見出される、「公德心のない人」の排除を目指した「公德心」教育の在り方について。第二に、有名授業資料「手品師」の活用方法などに見出される、「本当の気持ち」の学習を追求しつつ「方法論」の学習を忌避する傾向について。これらの検討の成果は、「公德心のない人」の表象をめぐる一考察—道德教育が道德的なものであるために—（2017年）や、「道德授業は道德的でありうるか？—教材「手品師」から考える—」（2018年）などの論考に示されている。以下では、このうちの後者に焦点を当てて報告する。

「手品師」（江橋照雄の作、小学校高学年向けの授業資料）を用いた道德授業においては、いまなお「方法論」の学習が忌避されている。すなわち、主人公である手品師の行動や判断の仕方について思考し議論するような道德授業は忌避されている。この傾向については、教育哲学者である宇佐美寛の議論を嚆矢とする少なからぬ批判がある（『「道德」授業に何が出来るか』明治図書、1989年）。だが、宇佐美らが提案するような道德授業は、つまり、手品師の取りうる手段を吟味し議論

しながら、手品師が置かれたような場面における「行動方法」（宇佐美の言う「システム」）を学ぶ、といった展開の道德授業は、数多くの再批判に晒されてきた。

たとえば、著名な小学校教師である加藤宜行は、宇佐美の提案の系譜にある「適切な行動パターンを吟味」する道德授業を、単なる「行動パターン」や「マニュアル」の学習であると指摘する（『道德授業を変える 教師の発問力』東洋館出版社、2012年）。代わりに加藤が提案するのは、悩んだ末に「男の子」のところへ行った手品師を指して、「自分の本当の気持ち」「本当の自分」に気付いた、と子どもたちが指摘するような授業である。

こうした再批判の根底にあるのは、よりよい方法を模索する道德授業は、「本当の気持ち」から乖離した何物か、「遂行」から乖離した「演技」のような何物かについて学ぶ授業であるのだから、退けるべきだ、という発想であろう。だが、〈ふり〉の教育哲学の視座からすれば、それがどんな道德授業であれ学習者は、型や方法のみを純粋に学ぶことなどできないし、「本当の気持ち」のみを純粋に学ぶこともできない。

「手品師」を用いて「本当の気持ち」に迫ろうとする授業は、実は、方法論（「システム」）を学ぶ授業でもある。つまり、その授業において子どもたちが学ぶのは、たとえば、〈こうした授業においては、単なる方法の模索と目される発言は控えるべきであり、主人公の葛藤に共感しているかのように振る舞うべきであり、主人公の「本当の気持ち」を持ち出すことで、主人公の判断を正当化してやるかのような発言をするべきである〉といったシステムである。なお、この種のシステムを学ぶことは役に立たないというわけでもない。この種の方法論を学んだ者は、幾らか容易に、手品師のような生き方を称賛する人に対して、その人が道德的と見なすところの振る舞いを呈示できるかもしれない。

また、方法論についての学習は、「本当の気持ち」についての学習でもありうる。つまり、よりよい方法論を模索するなかで、「本当の自分」が創り（騙り）出される、といった事態も十分にありうる。この意味でも、よりよい方法について考え、議論する道德授業は、道德教育と呼ばれるに値する。

道德授業をよりよい仕方でも構想し実施し分析していくためには、方法論（「演技」）についての学習を「本心」（「遂行」）についての学習から峻別しようとする思考法こそを、問い直していく必要があるのである。

### (4) 人間の生と発達をめぐる〈ふり〉の教育哲学（主担当：藤田雄飛）

藤田は、〈ふり〉概念を巡る土戸の理論的な構成において示されている遂行と演技の図式に先立つ、原初的な構成が立ち上がっていくプロセスについて検討してきた。その成果は、〈ふり〉を身体像あるいは表象との関

係において分析し、この像がまさに「像として」現れてくるという発達の重要な一場面と切り離して考えることは出来ないことを示した研究成果論文「模倣・鏡・〈ふり〉」(2015年)と、同じく遂行と演技の図式に先立つものとして、幼児がコミュニケーション行為として生起させるような「ふり」に関する発達心理学研究を取り上げた研究成果発表「〈ふり〉を生きるということ」(2016年)において示されている。

前者の論文「模倣・鏡・〈ふり〉」では特に、〈ふり〉の構成を可能にする図式を明らかにするために、模倣を取り上げ、両者を可能にする発達段階における重要な契機として、幼児の鏡像段階について検討を行った。そもそも、ふりと模倣に関する素朴な理解においては、ある他者の行動についての表象・イメージがまず主体にあって、それに身体各部を合わせていくこととして捉えられている。ここには、両者ともに他者の視覚像あるいはイメージを契機とすることとしての共通性が示唆される。ただし、後段において明らかにするとおり、模倣あるいは〈ふり〉において表象を契機とし、そこへの身体的一致をもって〈ふり〉や模倣という振る舞いの生起を語ることにについては留保が必要である。なぜなら、そうした身体の意志的-操作的使用以前に、私たちは身体によって生きているのであり、その意味では、表象を用いて行われる〈ふり〉や模倣は二次的なものと言えるからである。そのために本研究では、身体像を可能にしている地平の生起の問題、すなわち、まさに「像」そのものがいかに生じてくるのかという「像」の発達論・「像」の発生論を問う必要を示した。さらに、本研究では幼児の鏡像経験をそうした像の形成、およびそれを巡って生じる模倣の変容に関わる大きな転回点として検討を行った。具体的には、身体的な共鳴としての模倣から出発して、幼児の模倣が他者の像を再現することへと向かうプロセスの中に、鏡像を巡る出来事の意味を探るものである。幼児期の鏡像との出会いの経験を通して私たちは自己像と出会うことになるが、それは像があることを前提とした上での自己像との遭遇であるのではなく、まさしく「像そのものが見えるようになるプロセス」として、存在とその像(あるいは存在と現れ)の領野が開かれる原初的な場面に他ならない。この領野の上でこそ、模倣は私たちが良く知る模倣として、そして〈ふり〉は〈ふり〉として、立ち現れてくることになることを示した。

後者の発表「〈ふり〉を生きるということ」では、土戸の〈ふり〉概念が示した「遂行」と「演技」のスペクトラムという図式を踏まえつつ、その両者が分離してくるはるか手前において、それらが混じり合った生があったということを確認した。その上で、遂行と演技が切り分けられる地平がそこから開かれ、〈世界〉という意味的な構造が「制作」され

る様を描くための試論を提示した。

心理学者の麻生武は『ファンタジーと現実』(金子書房、2011年)のなかで、ファンタジーを通して現実を多重化し、複数のリアリティを構成しながら生きている私たちの生の根源を「ふり」のうちに見いだしている。ここでの「ふり」とは、「手本とそれを写す行為との“本来的なズレ(の認識)”」を契機とする対人関係上の振る舞いであり、麻生は第1段階のふりを「コミュニケーション行為としての“ふり”」として位置づけ、生後3-4ヶ月の赤ちゃんに見られる「嘘泣き」や「からかい的ギビング」を分析している。そこでの振る舞いを便宜的に切り分けるなら、おそらく赤ちゃんが「遂行」として泣き、それをおとなは「演技」として受け取るというような、複数者の振る舞いが交錯する相互行為の場(舞台)が生じていると言える。

続けて、道具的な対象を用いた動作を通じて、その動作の表象そのものが立ち現れてくる場面をもとに、「動作的表象としてのふり」を位置づける。動作的表象とは、ふりをする動作を通じて、かろうじてその動作の中に表象(representation)と呼ぶに値するようなものの芽が、目の前に現前しうようになったことを意味している。アクションを通してそのアクションにともなうイメージを自分自身に対して喚起しているものであり、それゆえに子どもはふりを通してこそ諸事象の表象とその意味を獲得していくのである。その後、「遅延模倣」によって示される「記号行為としての“ふり”」によって、いま・ここを越えていくふりが可能になり、明確な演技性を持つに至る〈ふり〉の原初的構成(すなわち「遂行と演技の2極のスペクトラム」)を獲得することになると言える。

なお、「動作的表象としてのふり」は、複数の経験を重ねつつもいまだ曖昧な意味連関しか持たない子どもが、ふりを通してその動作の意味するところを獲得していく場面であった。この「動作的表象としてのふり」の繰り返しを経て、そして諸対象の細分化と意味化を経て、主体は徐々に世界を豊かなものとしていく。この意味で、身体の運動経験としてのふりは、世界をそれ自体において構成していくと考えられることを提起した。

以上を踏まえ、本研究全体の成果についてまとめておきたい。本研究は、ルソーの礼儀作法論・演劇論・教育論、自律と教育をめぐる近現代の思想、現代日本の道徳授業教材とその活用法を、〈ふり〉の教育哲学の視座から検討することで、教育をめぐる近現代の認識・思考が、「遂行」と「演技」とを峻別しようとし続けていることを確認してきた。のみならず、教育を含む人間の営為について、「遂行」と「演技」を二項対立的に峻別するのではないような仕方でも、認識し、思考するための方途を、〈ふり〉という概念を用いて提示してきた。さらには、鏡像段階論や近年

の発達心理学研究の諸成果を踏まえて、人間において〈ふり〉が〈ふり〉として立ちあらわれるプロセスと、人間が〈ふり〉を生きることの意味を解明することを試みた。

これらの研究成果は、本研究グループが当初〈ふり〉について共有していた素朴な見方、すなわち人間の行為は常に〈ふり〉である、といった見方に見直しを迫るものであった。人間の営為の多くは〈ふり〉である。だが、それが〈ふり〉であるということは決して所与の事柄ではない。なお、人間が「遂行」と「演技」のグラデーション上を生きることができるようになるためには、「遂行」と「演技」の二項対立図式に基づいて人間をとらえる他者（オーディエンス）の存在が、不可欠であるようにも思われる。こうした知見と着想を踏まえて、人間と教育をめぐる近現代の思想に関して〈ふり〉の教育哲学の観点から更なる論究を重ねていくことが、また同時に、〈ふり〉の発達論ないし人間学について更なる思索を紡いでいくことが、本研究の今後の課題となろう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 9 件）

- ① 山岸賢一郎・鈴木篤・山口裕毅「道徳授業は道徳的でありうるか？—教材「手品師」から考える—」、『教育哲学研究』117号、査読無、2018年、印刷中
- ② 鈴木篤・山岸賢一郎「「規則の尊重」の道徳授業の課題と可能性—「雨のバス停留所で」を例にして—」、『道徳教育方法研究』23号、査読有、2018年、11-20
- ③ 藤川信夫・広瀬綾子・岡野亜希子「演技・〈ふり〉の教育思想史研究の可能性について」『近代教育フォーラム』26巻、査読無、2017年、114-121
- ④ 宮川幸奈「自律と他律の現れ方—意図と理由の空間への参入をめぐる—」『九州教育学会研究紀要』44巻、査読有、103-110
- ⑤ 山岸賢一郎、「「公德心のない人」の表象をめぐる—考察—道徳教育が道徳的なものであるために—」『長崎大学教育学部紀要』81号、査読無、2017年、103-120
- ⑥ 宮川幸奈、岡野亜希子、山岸賢一郎、藤田雄飛、有源探ジェラード「〈ふり〉の教育哲学 3.5—道徳教育・舞台・オーディエンスをめぐる—」『教育基礎学研究』13号、査読有、2015年、91-106
- ⑦ 土戸敏彦「〈ふり〉論による「自律・他律」図式の解体—その教育学的帰結—」『教育基礎学研究』13号、査読有、2015年、45-58
- ⑧ 藤田雄飛「模倣・鏡・〈ふり〉」『教育基礎学研究』13号、査読有、2015年、73-90

〔学会発表〕（計 10 件）

- ① 山岸賢一郎・鈴木篤・山口裕毅「道徳授

業は道徳的でありうるか？—教材「手品師」から考える—」、教育哲学会第 60 回大会（大阪大学）、2017 年 10 月

- ② FUJITA Yuhi, An Essay on Philosophy of Development from the View of the Theory of Umwelt, Kyudai-Atenei philosophy and Education (K.A.P.E) Colloquium (kyushu university), 2017 年 7 月
- ③ 鈴木篤・山岸賢一郎「「規則の尊重」の道徳授業の課題と可能性—「雨のバス停留所で」を例にして—」、日本道徳教育方法学会第 23 回大会（香川大学）、2017 年 6 月
- ④ 岡野亜希子、「演技・〈ふり〉の教育思想史研究の可能性について—『ダランベールへの手紙』におけるルソーの演劇批判から演技・〈ふり〉を考える」（コロキウム 2 「演技・〈ふり〉の教育思想史研究の可能性について」）、教育思想史学会第 26 回大会（武庫川女子大学）、2016 年 9 月
- ⑤ 藤田雄飛「〈ふり〉を生きるということ」（ラウンドテーブル「〈ふり〉の教育哲学の射程」）、日本教育学会第 75 回大会（北海道大学）、2016 年 8 月
- ⑥ 宮川幸奈、山岸賢一郎、岡野亜希子、藤田雄飛、「〈ふり〉の教育哲学 3.0」、九州教育学会第 67 回大会（名桜大学）、2015 年 12 月
- ⑦ 岡野亜希子「劇場演劇と祝祭をめぐるルソーのスペクタクル論」、日本教育学会第 74 回大会（お茶の水女子大学）、2015 年 8 月

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山岸 賢一郎 (YAMAGISHI, Kenichiro)  
長崎大学・教育学部・准教授  
研究者番号： 20632623

### (2) 研究分担者

岡野 亜希子 (OKANO, Akiko)  
近畿大学・産業理工学部・准教授  
研究者番号： 60457413

藤田 雄飛 (FUJITA, Yuhi)  
九州大学・人間環境学研究院・准教授  
研究者番号： 90580738

宮川 幸奈 (MIYAGAWA, Yukina)  
熊本学園大学・経済学部・講師  
研究者番号： 90806035

土戸 敏彦 (TSUCHIDO, Toshihiko)  
神戸常盤大学・教育学部こども教育学科・教授  
研究者番号： 30113096